



特定非営利活動法人

アーシヤ

アジアの農民と歩む会

会報
70号

クリスマスに神の冒険 を目撃する

アーシヤ正会員・那須塩原教会牧師
今野 善郎

今年の2022年4月に日本キリスト教団那須塩原伝道所に着任しました。これまで牧師と幼稚園園長を兼任しながら36年間、鹿児島県（指宿市・鹿児島市）、福島県（須賀川市）、神奈川県（川崎市）で働いて来ました。65歳を機に那須塩原伝道所に来て、「ASHA」の存在と働きをはじめて知りました。そして「ASHA」はヒンディー語で「希望」という言葉であることを2022年度の総会で知りました。アジア学院の働きが研修生を日本に招いての学びに対して、「ASHA」はインドに人を派遣してのアウトリーチの働き、「アジア学院」と「ASHA」は、吸って吐く呼吸のような関係と受け止めました。

活動の場がウツタルプラデシュ州と聞いて驚きました。私は大学で山岳部に所属し、山登りばかりの生活で、北極点を目指したりもしました。ヒマラヤの8000m峰に登頂するのが夢で、当時、山仲間では8000m峰（世界に14座ある）に登頂した者をタイガー・クライマーと呼んで憧れていました。最初にヒマラヤに挑戦したのが42年前、日本山岳会学生部の仲間とウツタルプラデシュ州のガンゴトリ（ヒンドゥー教の巡礼地で有名）から3日ほどのキャラバンで着く高峰（6777m）でした。私はその登山で表層雪崩に遭い、友人と二人で流されながら私だけ助かる、痛く重い経験をしました。この事故の償いもあり牧師になった、忘れられない地名で、何か「ASHA」と不思議な縁を感じました。

その後も懲りずに、2度ヒマラヤに挑戦し、7000m峰に登頂して、ヒマラヤ登山は卒業しました。そんな冒険の真似ごとをしている時に、ポール・トゥルニエ著『生の冒険』で「最大の冒険者は神である」の言葉を読みました。クリスマスで必ず読まれる「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ば

れる。」（マタイ1：23）が神さまの最大の冒険であると。なぜなら、完全であり創造者である神は、被造物の人間を愛するあまり、大切な独り子であるイエス・キリストを被造物の人間の姿でこの世に降したからであると。神は神であり、愛する独り子を降さなくても良かったが、あえて私たちを救うために自らを破り、イエス・キリストに被造物である人間の姿をとらせ、十字架で殺す、自己矛盾に挑戦したからである。トゥルニエは、教会が組織化されることで管理・運営の名で硬直している、信仰者も信仰生活が義務となり、創造性を失い「生の冒険」にまつわる躍動感と歓喜を失っていると指摘し、冒険者である神に倣って、信仰者も教会も冒険を避けてはならないと説く。「ASHA」の働きは、インドの硬い岩盤を素手で掘るような開拓という冒険の働きです。

今年のアドヴェント（待降節）は、11月27日（日）からはじまり、4週の日曜日を経て、12月25日に至る期間です。幼稚園の教諭に東京ディズニーランドが大好きな人がおり、その人に「ディズニーランドは、乗り物を待つ時間ばかりで、あの長時間の待ち時間が耐えられない」と言ったら、その教諭は「その待ち時間が楽しくてしょうがないのです」と言うので驚いたことがありました。このアドヴェントは、神の冒険の証を目撃するのを、張りつめた姿勢で楽しみながら待つ日々です。3人の学者たちも幼子を礼拝した後、その神の冒険に促されて「別の道を通して自分たちの国へ帰って行った」（マタイ2：12）ように、私たちも新しい課題に挑戦する冒険者になりたい。



新型コロナ感染拡大前のマキノスクールのクリスマス



持続可能な農業の普及に必要なこと



農村の伝統と近代化の共存 ～見直されるべき農村の価値観～

事業統括責任者・三浦 照男

「伝統的で、古臭い、面白みがない、収入が低い」と農村をネガティブに考えている若者は多いのではないのでしょうか。これは世界的にその傾向にあります。特に経済成長に伴って近代化が浸透している地域においてその傾向が強く出ているようです。このネガティブな考えをポジティブ思考に変える農村での活動が要求されています。

◆ インド独立後、社会主義経済から自由経済へ

1947年のインド独立後、閉鎖的な独自の社会主義経済路線を1990年ごろまでとってきたために、近代化が遅れ、最貧国の仲間に入ってしまった。アジア諸国でも優良であったインドの重工業は衰退してしまいました。インド独自の伝統を守り、可能な限り国内の技術と資本で建国するという自給自足なガンジー主義経済政策が国際競争力を脆弱にし、結果的に国内産業の衰退を助長したのです。それは農村部でも同じで、実際、農村では不作となれば食べもの得られない農村住民が出ていたのです。ガンジー氏は独立後状況を知ることなく暗殺されましたが、インド独立の父として敬われていた彼の主義主張は40年以上インドの発展に大きな影響を及ぼしました。彼の非暴力による独立運動等、彼の指導力は国内外から絶賛されていたのです。

しかし、経済の困窮からインドは1990年より自給経済政策から自由経済へと舵を切りました。歴史ある大国インドが世界でも最貧国のレッテルを貼られるようになったことで、知識階級またビジネス富裕層からの不満が募り、政治を動かしたのです。彼らは外資や海外からの技術を受け入れ自由経済へ移行することによってインドの経済成長を促すべきだと、主張したのです。

筆者が1995年、外資によってIT産業が急速に伸びた南インド・カルナータカ州を訪問した際に、種苗ビジネス店主に「ガンジー主義をどう思うか？外国産の種はどうか？」と訊いてみました。「ガンジーは尊敬するけれど、彼の思想、主義ではインドは何時までたっても貧しいよ。彼は伝統にこだわりすぎる。もっと海外からの技術や資本を入れ、インドの経済を発展させるべきだ」「外国産の種は単価は高いけど収量がよいからよく売れるよ」との答えが返ってきました。

◆ 多国籍企業と農民の抵抗

農業分野においても大きな動きがありました。1990年代中頃からインド政府が多国籍企業の種等の資材を使った商業的農業開発を推し進めようとする政策に対し、カルナータカ州では同州のガンジー主義者の最大農民組織（KRRS）が全国の農民グループと連携して多国籍アグロビジネスのインド参入に反対運動を展開していました。KRRSは可能な限り種は自国のもので自給すべき、GMOや特許を持つ多国籍企業の種苗に頼ってはならないとの主張です。その運動は他の州の同様な主義を共有する農民団体、市民団体と提携し首都デリーの関係官庁にデモを繰り返したのです。

しかし、自由経済が農村にも浸透し始めた2010年代に入ると、外国依存の農業政策反対運動は収束してしまいました。いつのまにか多国籍企業が開発したGMO綿、油脂用大豆の種が普及してしまったのです。更に、インドの代名詞となりつつあるIT産業、そして海外技術導入による車産業が増幅し、人々の関心は農業から工業化、近代化へと移っていきます。自転車、自動二輪、そして自動車、携帯電話からスマホへと農村にも同様な急速な変化が現れます。

農村にある自宅敷地に小さな小屋を建て、SIMカードの代行販売等、Wi-FiやPC関連の商売を始める若者が急増しました。インド国内はもとより世界にいる家族、親類、友人に手軽にメッセージが送られるEmail屋さん、インターネットバンキング代行等のビジネスです。しかし、スマホが村でも普及されるようになり、住民自らがSNSを使えるようになると、利益が少なくなり閉店してしまうところも少なくありません。

◆ 見直されるべき農村の価値観

確かにインドはIT産業等の躍進により経済発展してきた一方で、食料生産、伝統文化の保持、自然環境の保持といった農村の重要な役割と改善を置き去りにしてきたように感じます。独立国家としての誇りの源は農村にあることをもっと考えるべきなのです。6割のインド人は農村に居住しているのですから。近代化は避けられない状況ですが、もう一度、冷静に伝統的価値観と近代的価値観との共存をどのように折り合いをつけるべきか、ということを経済農村住民自身が考え抜く必要があるのです。そのためにも農村の今ある課題を見据えなくてはなりません。都会とは違った「幸福感」をスタッフや農村住民、農村女性たちと味わいながらアーシャの事業が進められるように願っています。



新任日本人スタッフ



グローバル化に乗るインド その農村部の行き着く先は？

大木 恵利

アーシャ＝アジアの農民と歩む会を支援していただいている皆様、はじめまして。9月下旬より現地採用でマキノスクールの総務会計を担当している大木恵利です。私がマキノスクールで働くのは今回で2度目になり、2012年から2016年5月まで、インターンを経て現地派遣スタッフとして働いていました。当時、大学院を出てすぐに就職したマキノスクールでは、良い意味で「開発」という言葉の意味を考え直す機会を与えてくれた場所でした。持続可能な農業・農村開発コースの研修生だった夫と2017年に結婚して以来、義実家のあるマニプール州農村部で暮らしていましたが、今回縁あって、夫と2人の娘と共に思い出の地、プラヤグラージに戻って来ました。

私が初めてインドに来たのは2007年になります。ジャールカンド州農村部の小学校でボランティアをしました。2度目のインドが2011年で、南インドのタミールナドゥ州のNGOで3か月間インターンとして働きました。3度目のインドが2012年、マキノスクールで働き始めた時です。そして、2017年に結婚を機に初めてインド北東部のマニプール州に足を踏み入れました。私が初めてインドを訪れてから10年以上の年月が経ち、その間、インドの代表的な大都市ムンバイやバンガロール、チェンナイなどでは都市開発が目まぐるしいですが、インド各地では未だにインフラ整備が整っていない地域が多いと思います。

例えば、夫の出身地であるマニプール州は海拔790mに位置し、州面積の7割が山岳部とされています。この山岳部では5つの県が構成され、その人口は州の総人口の38%、残りの60%は州都を含めた平野部に暮らしています。そこでは、その特有の地形が手伝って青少年たちが満足に働いていける産業がゼロに等しいと言っても過言ではなく、家事手伝いや農作業に従事するか、都市部へ移住せざるを得ない状況となっています。また、インド北東部のアッサム地方は石油や天然ガスなどの資源に恵まれていることからインド中央政府もその重要性を

認めていますが、多くの山岳部族が暮らし、反政府武装組織も存在するマニプールは、部族間の衝突や武装組織による反政府活動がインフラ整備の遅れに加え、産業の成長の足かせの一部になっているとも言われています。

私は、マニプール州の平野部に位置する小中一貫学校で働いた経験がありますが、平野部を囲む山岳部のいくつかの村を訪れる機会がありました。山岳部ではプライマリーヘルスセンター（村レベルの政府の病院）がなく、公立の小学校（政府系）があっても登録されている教師が学校に来ない場合がほとんどという状況の中、どの村も老人や幼子を抱える女性ばかりが目立ち、若い働き盛りは仕事のため、子どもたちは設備の整った学校へ通うために都市部で下宿しているという状況でした。幸い、山岳部で暮らす部族は代々殆どが焼畑農業を営んでいるので米や野菜などは自給しており、地形を利用してバナナやパイナップル、グアバ、マンゴー、ジャックフルーツなどを育てている人は多く、生活していく分には困りません。しかし、共同体やコミュニティとして持続的に経済的に存在し続けることが出来るかと言われれば疑問です。



筆者（左端）とその家族。

それでも、私がマニプール州で訪れたある山岳部の村は他の村と違ってとても活発でした。この村には政府の公立小学校がありましたが、前述のように教師が学校に来ることがなく、生徒たちは勉強したくてもできないという状態が長く続いていたそうです。しびれを切らした保護者たちは、州都や州外で大学を卒業した若者たちに、村の子どもたちのために私立学校を開いてくれないかと声掛けをし始めたそうです。今ではこの村の子どもたちはみんなこの学校で保育園から小学校6年生までを勉強しているのだそうです。

マニプール州は今年に入ってから長年建設されてきた鉄道が開通し、今後は人や物の流通が盛んになることが予想されます。物が州外から流れてくるだけでなく、山岳地帯特有の農産物や加工品が安価で州外へ輸送され、地域の活性化に繋がる可能性も大いにあります。次世代の経済大国となりうるインド。これから先のインド農村部も、時代の流れに翻弄されながらもその動きをプラスに変えていくこと、またはそれができる人材が必要とされています。



マキノスクール卒業生は今



マキノスクールの経験と モロッコでの国際協力の仕事

現JICA職員モロッコ駐在員・

千代島 諒平

SCSAD 2014年卒

私が2014年にマキノスクールを卒業してから8年が経ちました。当時、毎日何度も実践して体が覚えた、鍬やつるはしを使っての耕作、マッシュルームの床をピットリ袋に詰める技、10秒以内に手で鶏を捌く秘技が今でも出来る気がしています。農村に行っては井戸水でシャワーを浴びたり、農家さんに教えてもらいながら牛糞をこねて料理用の燃料を作ったり、今でも鮮明に記憶に残っています。

当時初めての異文化生活の中で、最初は受け入れがたいことがあっても、それを受け入れることによってパッと視界が開けたこと、それによって自分の今までの常識・イデオロギーが覆ることもよくありました。例えば、アシナガバチが食堂の入り口に巣を作って大量発生していたとき、近寄りたくないと思うのが普通ですが、ミャンマー人の同級生はそれをチャンスとばかりに、その巣を素手で掴みハチを追い払い、ハチノコをおやつと言わんばかりにパクパク食べるのです。ハチノコを勧められた私は人生経験と思って食べたら、意外に悪くなく、油で揚げたらそれこそ美味でした。こんなことが日常茶飯事。異なる常識を持った同級生と意見が対立したときも、他者の視点に立って、「まあ、大丈夫だね」と楽観的に、インクルーシブに物事を考えることで相手を受け入れ、相手も自分を受け入れてくれることを知りました。

そんなマキノスクールを卒業後、大学院を経てJICAに入り、今ではJICAのモロッコ事務所で主に農業や水産セクターのプロジェクト、そのほかにも総務・経理を担当しています。JICAの各国事務所は、主に情報収集や先方政府との交渉・折衝、現地でのプロジェクト管理などを担い、いわば意思決定の本部との橋渡し役になるような仕事をしています。

ところで、モロッコ人は本当に賢い。モロッコでは第一言語のダリジャ語（アラビア語モロッコ方言）、フランス語、正統アラビア語や出身によってはベルベル語、若い人は英語も流暢に話します。言語もそうですが、特に仕事に関わるような人はロジカルで理路整然と主張



先方農業省とのプロジェクト協議の場にて
(向こう側右端が筆者)

し、インドにいるようなめちゃくちゃなことを言う人も少ないです（笑）。そんなモロッコ人はインド人ほどではなくとも、交渉ごとになると難しく一筋縄ではいかないことも多いです。

そんな環境での対政府・対人間の交渉や折衝調整が主な仕事ですが、マキノスクールでの経験が生きています。交渉は相手を論破するのではなく相手に気持ちよく理解してもらうことで物事が進むことが多いです。あの時ハチノコを食べていなかったら、相手のことを知ろうと思わなかったら、自分のものさしだけで物事を考え、自分の主張を通すことに必死で交渉ごとがうまくいかなかったかもしれません。相手の話をきちんと聞かず、相手の立場を考えない姿勢で仕事をしていたら、先方政府・パートナーとの信頼構築はあり得ないでしょう。マキノスクールで全く違う価値観を持った仲間と共同生活をし、アーシャの活動が村の農家さんの信頼を得て、農業を変え、村が少しずつ発展していく様を自分の目で、近くで見ていたからこそ、今の自分の仕事の姿勢に繋がっていると思うのです。



地方道路整備事業のプロジェクト現場にて（右が筆者）



アジアの国際協力



日印青年国際交流プログラム 900km横断課題体感型アイデアソン

インド事務局長 川口 景子

2022年は日本とインドの国交樹立70周年です。戦後の混乱と復興の中、1952年4月28日に両国は国交を樹立しました。地理的にも離れており、言語や考え方等の違いはあるものの、歴史的に日本とインドはお互いを頼りにする友好関係にあり、現在も、経済、技術、文化の多岐に渡る分野で協力や交流があります。そのような中で、今回、公式に未来に向けて日印の青年が交流できる機会を持つという話が持ち上がりました。日本大使館をはじめとする日印国交樹立70周年実行委員会が設立され、「900km横断課題体感型アイデアソン」というプログラムが企画されました。

「900km横断型」とは、デリーから、タージマハルで有名なアーグラ、ウッタルプラデシュ州の州都ラクナウ、本会の現地事務所のあるブラヤグラージ、そして、最終地点のバラナシまでバスで移動して、地理や街並み、農村部、そこに息づく人々とふれあい、感覚的に体験するという意味が込められています。スケジュールを聞いたときは、道が良くなって来たとはいえ、まだまだ暑い時期になって大胆なことを企画されるのだろうと思いましたが、そこから得られる実体験はより豊かになると思いました。それが、「課題体感型」というタイトルに凝縮されており、また「アイデアソン」とは、マラソンのように見聞したことに対して議論をし、アイデアを出し続けるという意味合いが込められています。異文化、言葉、宗教の違いを乗り越えて、日本とインドの青年たちが協力し合い、900kmを移動しながら、大都市から農村、農業からビジネス、IT、観光など、幅広いテーマで視察、話を聞き、最終地バラナシで日本人とインド人の学生2名ずつが4人グループになり、議論をします。チームで課題を見つけ、解決案をつくり発表するという活動にするとのこと。そこで、インドで日本の有機農業や食品加工の技術を普及しているアジアの現場も訪問先に含めたいというお話があり、5月から着々と準備を進めてきました。

9月20日当日、日印の学生20名ずつ、日系企業などから募った日本とインド人のスタッフで構成されるメンターと事務局から20名、合計56名の参加者と、在印日本大使館、インド外務省、ブラヤグラージ県庁からそれぞれ1名ずつオブザーバー参加のゲスト、NHKとアジアコミュニティニュースネットワークから2名ずつ取材班としてマキノスクールに到着されました。現場では全員総出でのおもてなしとなりました。プログラムではまず、アラハバード有機農業組合でつくられている日本米、豆腐、味噌醤油を味わっていただくために昼食を

とっていただきました。メニューは事前に打ち合わせていた、白米、豆腐ダールスープ、キノコと青菜の醤油炒め、味噌ディップ付きサラダ、野菜のカレー炒め。インド人の学生さんにも日本の味を紹介するよい機会になりました。その後、三浦副代表（マキノスクール学部長）によるレクチャーが行われました。

「食料は人間にとって必須のものであり、独立した国家にとって基盤であるため、食料を自給することは大切である。しかし、発育不良が見



三浦副代表によるレクチャーの様子

受けられるインドでは食料が不足しているといえる。また、生産量の伸びばかりを求める近代農法だが、持続的かつ安定的な農家の収入を約束する農業システムの普及が必要とされている。マキノスクールでは食料生産の現場である農村の人材を、草の根レベルで育成するべく様々な活動を行っている」ことをレクチャーで説明しました。多くの学生が質問をしてくださり「農業普及にはどのような近代技術を取り入れていますか?」「マキノスクールが描く農村リーダー像とはどんなものですか?」「鴨水稲同時作を取り入れてから、農家にはどのような変化がありましたか?」回答者として、組合の生産農家であるアンシュマンさんにも直接答えてもらいました。

雨が降ってしまい残念ながら農場視察はキャンセルされましたが、有機農業組合の食品加工部屋（商品の包装、豆腐加工室、モリンガ加工室、味噌醤油蔵、精米所、お米の選別



精米所を見学する参加者

所)を4組に分かれて、実際に加工しているスタッフが英語で説明しました。参加した学生さんは、農業やジェンダーに関心を持つ方が多くいたとのことで、「ここに来るのを一番楽しみにしていました」、「多くの女性が生き生きと働いているのが印象的だった」とコメントしてくださった方もいました。参加者の学生さんたちは国ごとに分かれてしまうことなく、わきあいあいと関係を築いていました。また、事務局やメンターの方たちも今回は20-30代の若手の方が多く関わり、次世代の育成を根底から考えたイベントだと感じました。アジアの現場での経験が両国の学生の学び合いと橋渡しとなり、持続可能な発展にとって大事な農村・農業についての関心が高まる機会になったのではないかと思います。



農村女性育成



AVSの研修旅行とその成果

ラージャスターンへの旅

インド事務局長 川口 景子

アジア生協協力基金より今年度、三年目最終の助成金を農村女性の自立のための縫製事業のためにいただきました。コロナ禍で売り上げが激減した状況を打開すべく、これまで積み重ねてきたマーケティングと、商品開発の集大成を開花させなければならない1年です。やっとコロナ感染者数が落ち着いたところで、今まで頑張ってきたAVS縫製メンバーと視察研修旅行に行く絶好の時期にもなりました。

研修先を検討する上で念頭にあったのは、よきパートナーとなる生地生産者と未だ出会えていないことでした。そこで、ブロックプリントやその他の手工芸品で有名なラージャスターン州の州都ジャイプールに目を付けました。目的は、①ブロックプリントの生地について理解を深める、②共感する方向性を持つ生地の工場とつながりを持つ、③インドのデザインを代表する建造物や手工芸品等のアートに触れ感覚を豊かにすることです。9月15日に、AVSの5人のメンバーと夜行列車に乗り込み、ブラヤグラージから西に約760km、ジャイプールを目指しました。

まずはジャイプール市街地から西側に30kmのバグルー村に移動しました。バグルー村はブロックプリントが有名なジャイプールの中でも、特に伝統的な草木染の手法を継承している生産者が多くいます。この工場では、マハラジャ（王様）が着る衣服をデザインしていた「印刷業カースト」の村落で、5～600年以上の伝統を引き継いで草木から色を作り出し続けていました。工場の中に案内されると、まずは発酵や土などの有機物の独特な匂いがしてきました。赤い色はマダール（和名：アコン）とミョウバンを混ぜて出し、黒い色は鉄くずと黒砂糖を発酵させて20～30日ほどたったものを使っている、等説明を受けました。10メートルほどの長い台の上に、自然の色が付きやすくなる媒染液（天然由来）を染み込ませて、土の上で乾かした布を張り、職人が木版のスタンプを押していきます。手で行うため数ミリはずれますが、それが本物の証です。藍染めの藍を発酵させ15年以上継ぎ足して使っているというタンクもありました。酸素が入ると黒くなってしまうため、いつも蓋をしています。村の女性も働きに来ていて、「牛の世話などの家の



職人が木版を押す様子

仕事をしてから仕事に来ることが許されている。経験を積んで、様々な技術を身に着けた」と教えてくれました。また、こちらの工場では染色に使う大量の水を、ソーラーエネルギーを用いて2度リサイクル利用し、3度目の水は農業用水にしているとのこと、水資源の少ない乾燥地で水を大切に作る工夫がありました。

次に同じくブロックプリント（化学染料）で有名なサンガネール村に移動し縫製工場を視察しました。効率的に商品を生産するための設備や仕組みが整っており、各持ち場の職員が惜しみなく見せてコツを教えてくださいました。中でも、問題意識のあった、ミシンの調整の仕方や、効率的な大型スチーマー尽きアイロンで素早く製品の皺を伸ばしているところを見て、自分たちでも取り入れたいと興奮していました。また、ジャイプールの北にあるアノキー・ハンディクラフト博物館は、職人と伝統技術を守るために創業した会社の博物館です。様々なブロックプリントの手法を用いて丁寧に作られた生地や衣類、手工芸品の展示があります。13工程という多くの染色とプリントの段階を重ねて作られたベストの、その一つ一つの工程の展示や、伝統的な模様の意味など、生地に関して多くの知識を得ました。また、引退した職人によるブロックプリントの実演もあり、メンバーも体験させてもらいました。さらに、木版職人による実演では、細かい彫刻を掘る作業も見学することができ、いくつもの木版が重なって一つのデザインになる様子も理解できました。

参加したメンバーからは「ブロックプリントの生地はなぜ高いのかが分かった。お客様に説明して、生地がどう作られているのかを伝えたい」という声も上がりました。素晴らしい業者の方とのつながりも与えられ、今後のAVSの活動に活かしていきたいと願っています。



ブロックプリントに挑戦するAVSメンバー



クリスマスのお願い



クリスマスギフトはアーシャストアで 農村女性支援の輪を広げましょう！

代表理事・三浦 孝子

クリスマスの季節を、いかがお過ごしでしょうか？大切な方々へのプレゼント、何にしようかと迷っていらっしゃる方、ご自身の手作りプレゼントをご用意されている方も・・・。

今年のクリスマスプレゼントに、アーシャが支援している北インド農村女性たちが、心を込めて手作りしているAVS縫製作品やモリンガ製品はいかがでしょう？ご購入いただくと、それだけで、彼女たちの活動支援につながり、彼女たちの家族をも支えることとなります。今回の会報と一緒にクリスマスギフトのチラシも作成いたしました。12月末までのご予約、ご購入の方々には、簡易ギフトラッピングの上でお送りいたします。

10月に収穫加工したモリンガパウダーは最終検査を実施した後、11月に入って日本に到着いたしました。おいしくできあがったモリンガパウダーでクリスマスケーキはいかがですか？スポンジ生地混ぜることも、デコレーションの生クリームにもスーッと馴染んでおいしく仕上がります。温かいお飲み物にもピッタリです。

AVS縫製クラスでは、今シーズンより、さらにスキルアップしたアイテムを加えました。着用された方の腰回りがすっきり見えるタック入りギャザースカートと、初めてのトップス、チュニックのお目見えです。

生地は、2種類から選ぶことができます。おしゃれなハンドブロック プリント生地と、手紡ぎ、手織りのカディコットンです。カディコットンで作られた服を身に



カディチュニックを着用した
アーシャの支援者親子

着けたとき、肌触りがとてもよく、夏に涼しい、冬に暖かい生地、それがカディだと聞いたことを思い出しました。

まだAVSスタッフはトップスにも、カディコットンにも初挑戦のため、長さにはばらつきがあったり、裾のカーブがきれいに左右対称にならなかったり、試行錯誤中です。おかげで、今入荷しているチュニック在庫の分

だけ「訳ありお値下げ中」ということで、大変お買い得です。勉強熱心な彼女たちはすでに、キレイに仕上げる自信を持っています。また、今までのスカート制作の経験から、カディコットンスカートを大変美しく仕上げてくれています。真冬のおしゃれに、カディをお召しになって体感なさってはいかがでしょう？

今回届いたカディコットン商品を縫製したカピタさん（31歳）にインタビューしてみました。彼女は、農村保健ボランティアとしても、母子保健活動で活躍してくれました。もともと縫製が好きで、今では、AVSになくてはならないスタッフです。

Q: 家族構成はどのようになっていますか？

A: 15～6歳まで4人の子ども、夫、夫の両親、夫の妹の9人です（結婚は16歳）

Q: マキノスクールまで通うのは、大変でしょう？

A: 片道1時間以上かかりますが、毎日夫がバイクでバス停まで迎えに来てくれますので大丈夫です。

Q: 食事の支度は誰がしますか？

A: 私と夫の妹で作ります。

Q: AVSの仕事をされていて、一番楽しい時はいつですか？

A: ミシンで縫っている時が一番楽しく幸せです。

家には足踏みミシンがあり、4人のお子さんに洋服を作ってあげているそうです。今度、家族写真を見せてくださいとお願いしました。



カピタさん（右）と通訳してくれたプラハさん（左）

SNSで国内販売の広報活動をご覧ください

北インドの農村女性によるモリンガパウダーやハンディクラフトの商品をより多くの方々に認知していただくため、「ASHA STORE」のFacebookやInstagramで広報を始めました。イベントへの出店案内や商品紹介を通して当会のファンを増やしています。今後は商品の開発ストーリーや農村女性の様子や声も紹介していきます。ぜひ、フォロー＆応援をお願いいたします！



ASHA STORE

ローカルサービス
ASHA STOREでは、インドから届いたハンディクラフト製品を取り扱っています。イベント出店などの情報が入り次第お知らせします。

ashaasia.stores.jp/



avs.india



イベント・・・



モリンガとは

アーシャ事務局便り

✿ あなたの想いを世界へ、あなたの寄付でアーシャの活動を支援してください。

JICA筑波ご一行、アーシャ国内事務所ご訪問

10月14日、独立行政法人国際協力機構 筑波センター(JICA 筑波)より、睦好 絵美子 新所長、石沢 祐子 連携推進課長、研修事業課のみなさまが、アーシャの国内事務所をご訪問くださいました。JICAの国際協力人材創出と育成の事業において、アーシャが協力できる分野について、2時間余り、情報交換などを行いました。アーシャでは、JICA草の根技術協力事業に採択されており、現在、実施に向けて準備をしているところです。



会員のご継続とクリスマス募金のお願い

当会の活動は会員の皆様の会費とご寄付に支えられ、コロナ感染予防を徹底して続けています。皆様のご支援・ご協力に心より感謝申し上げます。2023年度の活動を発展・強化するため、会員のご継続と年会費ご納付をお願いいたします。ご寄付、クリスマス募金にもご協力ください。ネットショップ「ASHA STORE」でも会費、寄付、募金を扱っています。ご利用ください。



<https://ashaasia.stores.jp/>

持続可能な農業・農村開発コース (SCSAD) 2023年度学生募集

Special Course in Sustainable Agriculture and Development (SCSAD)



当会が支援しているマキノスクール (Makino School of Continuing and Non-Formal Education) では、インド国内、ミャンマー、ネパールなどの周辺国、日本から学生を募集し、草の根で農業・農村開発に従事する青年リーダーを育成する約9か月の研修を実施しています。各国の学生たちとの共同生活、実習・講義、見学旅行などを通して、持続可能な開発や農業・農村開発について学習しましょう！！

応募資格： 国際協力、農村開発に関心がある男女 (18~45歳)

期間： 2023年7月1日より2024年3月20日

学費： 700,000円 (往復航空券、海外旅行保険等は自己負担)

当会のホームページにて詳細を紹介しています。パンフレット、入学願書も入手できます。(応募期限：2023年3月10日)



<http://ashaasia.org/program>

事務局よりお知らせ

会費・寄付ありがとうございました。2022.8.16~2022.11.15 順不同、敬称略
誤字・記載漏れがございましたらご面倒でも事務局までご連絡ください。よろしくお願いいたします。

正会員	【熊本県】開義民
賛助会員	【北海道】平野伸吾, 平野みほろ【栃木県】川上聖子【福岡県】坂口馨子
終身団体賛助会員	【神奈川県】Blissful Blue
一般寄付	【北海道】平野伸吾【神奈川県】Blissful Blue
指定寄付	【埼玉県】二宮牧雄

- 会費 個人正会員 5,000円 団体正会員 20,000円 終身個人正会員 50,000円 終身団体正会員 100,000円
個人賛助会員 3,000円 団体賛助会員 10,000円 終身個人賛助会員 30,000円 終身団体賛助会員 50,000円

- 郵便振替 加入者名：アーシャ=アジアの農民と歩む会 口座番号：00160-0-315147

マキノスクールは、インド、ウッタル・プラデッシュ州プラヤグラージで活動するサム・ヒギンボトム農工科学大学にある学部で、本会が主に支援している団体です。実施している事業は、アーシャの会員の皆様からの会費・寄付ご支援、日本政府の無償資金協力や国内の助成財団からの助成金のほかに、インド三浦後援会、日本国外の様々な団体、個人の皆様からのご支援によって運営されています。プロジェクトを実施するにあたり、日本の皆様からの多大なご支援・ご協力に深く感謝申し上げます。

特定非営利活動法人 アーシャ=アジアの農民と歩む会

☆この会報は日本で製作・印刷しています☆

<事務局・交流センター> 〒329-2703 栃木県那須塩原市槻沢83-17

TEL : 0287-47-7840 FAX : 0287-47-7841

事務局 朝比奈宏、丹羽寿美 E-MAIL: info.jp@ashaasia.org ホームページ: <http://www.ashaasia.org>